OXIDE MAGNETIC MATERIAL AND PRODUCTION THEREOF

Patent number:

JP7223821

Publication date:

MANO YASUHIKO: MOCHIZUKI TAKESHI; SASAKI ISAMU; SHIMOKAWA AKIRA

Inventor: Applicant:

FUJI ELECTROCHEMICAL CO LTD

Classification:

- international:

H01F1/113; H01F1/032; (IPC1-7): C01G49/00; C01G49/08; H01F1/00

- european:

H01F1/113

Application number: JP19940018758 19940215 Priority number(s): JP19940018758 19940215

Report a data error here

Abstract of JP7223821

PURPOSE:To produce an oxide magnetic material containing magnetite mixed with a non-magnetic phase and easily and safety produce a large amount of powdery oxide magnetic material having desired saturation magnetization at a low cost by mixing Mg and Mn to hematite, hematite + magnetite or magnetite, mixing the obtained mixture with a substance having carbon-carbon single bond or double bond and baking the mixture. CONSTITUTION: This oxide magnetic material composed of powder containing magnetite and a non-magnetic phase in mixed state is obtained by mixing 0.1-4.0wt.% of a liquid substance or powdery substance containing C-C or C=C in the molecule to a powdery mixture produced by mixing 0.20-18.50wt.% of Mg to hematite or hematite + magnetite or to a powdery mixture produced by mixing 0.20-26.20wt.% of Mg to magnetite and baking the obtained mixture in an inert gas at 550-1500 deg.C.

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

(19) 日本国特許庁 (JP)

(51) Int.Cl.8

C01G 49/00

49/06

(12) 特許公 報(B2)

FΙ

C01G 49/00

49/06

(11)特許番号

第2860356号

(45)発行日 平成11年(1999) 2月24日

識別記号

(24) 登録日 平成10年(1998)12月11日

Α

Α

49/08		49/	08 A
H01F 1/00		H01F 1/	00 T
			請求項の数6(全 17 頁)
(21)出願番号	特願平6-18758	(73)特許権者	000237721
			富士電気化学株式会社
(22)出顧日	平成6年(1994)2月15日		東京都港区新橋5丁目36番11号
		(72)発明者	真野 靖彦
(65)公開番号	特開平7-223821		東京都港区新橋5丁目36番11号 富士電
(43)公開日	平成7年(1995)8月22日		気化学株式会社内
審査請求日	平成7年(1995)11月7日	(72)発明者	望月 武史
			東京都港区新橋 5 丁目36番11号 富士電
	•	-	気化学株式会社内
		(72)発明者	佐々木 勇
•			東京都港区新橋 5 丁目36番11号 富士電
			気化学株式会社内
		(74)代理人	弁理士 岡田 守弘
		審査官	米田 健志
			最終頁に続く

酸化物磁性材料およびその製造方法 (54) 【発明の名称】

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】ヘマタイトあるいはヘマタイト+マグネタ イトにMgを0.20~18.50wt%混ぜた混合 粉、あるいはマグネタイトにMgを0.20~26.2 Owt%混ぜた混合粉に、-C-C-あるいは-C=C 40 【請求項3】 ヘマタイトあるいはヘマタイトナマグネタ ーを分子中に有する液体状物質あるいは粉末状物質を O. 1~4. Owt%混合し、不活性ガス中で550~ 1500°Cの焼成処理したマグネタイトと非磁性相が 混在した粉末からなる酸化物磁性材料。

【請求項2】ヘマタイトあるいはヘマタイト+マグネタ イトにMgを0.20~18.50wt%混ぜた混合 粉、あるいはマグネタイトにMgを0.20~26.2 Owt%混ぜた混合粉に、-C-C-あるいは-C=C ーを分子中に有する液体状物質あるいは粉末状物質を O. 1~4. Owt%混合する混合工程(2)と、この 50 混合工程(2)によって混合した混合物を、不活性ガス 中で550~1500°Cの焼成処理する焼成工程

(5) とを備え、マグネタイトと非磁性相の混在した粉 末を製造する酸化物磁性材料の製造方法。

イトにMgを0.20~18.50wt%に、あるいは マグネタイトにMgを0.20~26.20wt%に、 更にMnを0.20~10.00wt%の範囲で両者を 併せて18.50wt%あるいは26.20wt%を越 えない範囲で混ぜた混合粉に、一〇一〇一あるいは一〇 = C - を分子中に有する液体状物質あるいは粉末状物質 を 0. 1~4. 0 w t %混合し、不活性ガス中で 5 5 0 ~1500°Cの焼成処理したマグネタイトと非磁性相 が混在した粉末からなる酸化物磁性材料。

【請求項4】ヘマタイトあるいはヘマタイト+マグネタ

イトにMgを0.20~18.50wt%に、あるいは マグネタイトにMgを0.20~26.20wt%に、 更にMnを0.20~10.00wt%の範囲で両者を 併せて18.50wt%あるいは26.20wt%を越 えない範囲で混ぜた混合粉に、-C-C-あるいは-C = C - を分子中に有する液体状物質あるいは粉末状物質 を O. 1~ 4. Ow t %混合する混合工程(2)と、 この混合工程 (2) によって混合した混合物を、不活性 ガス中で550~1500° Cの焼成処理する焼成工程 (5) とを備え、

マグネタイトと非磁性相の混在した粉末を製造する酸化 物磁性材料の製造方法。

【請求項5】上記焼成処理前に、造粒処理によって上記 混合粉を球状顆粒とし、上記粉末を球状としたことを特 徴とする請求項1または請求項3記載の酸化物磁性材

【請求項6】上記焼成処理前に、造粒処理によって上記 混合粉を球状顆粒にする造粒工程(4)を備え、

上記粉末を球状としたことを特徴とする請求項2<u>または</u> 請求項4記載の酸化物磁性材料の製造方法。

【発明の詳細な説明】

[0001]

【産業上の利用分野】本発明は、ヘマタイト、ヘマタイ トナマグネタイト、あるいはマグネタイトにMgと必要 に応じてMnを混合して焼成した所定の飽和磁化を持つ 酸化物磁性材料およびその製造方法に関するものであ る。

【0002】酸化物磁性材料である単相マグネタイト粉 は、磁性流体、電気抵抗素子、電子写真用のトナーやキ (MO) 100-x (Fe2O3) x

ここで、MはMgまたはMgとZn、Cu、Mnおよび Coのうちの1種以上との組み合わせを表す。xは53 モル%より大である。

【〇〇〇8】この磁性キャリア粒子は、式1で表される 組成を持つフェライトである。即ち式1で表される組成 について、酸素を含む窒素雰囲気下ないし窒素雰囲気下 で完全に固相反応を起こさせる1350°Cの焼成を行 い (明細書の第3頁の右欄の第35行から第37行)、 これら組成物を完全に固相反応させて均質にし、全部を 磁性相にした微小な球状の顆粒である(後述する図1 4、図15のX線マイクロアナライザによるFeおよび Mgの分布の写真を参照)。この磁性キャリア粒子は、 ×が53モル%よりも大のときにフェライトにMOを加 えて焼成する際に、酸素と窒素の混合比を変えて焼成 し、任意の抵抗値に調整したものである。この磁性キャ リア粒子によれば、粒子の抵抗値を任意に調整できる が、粒子の飽和磁化を任意に調整できない。

【OOO9】本発明は、これらの問題を解決するため、 ヘマタイト、ヘマタイト+マグネタイト、あるいはマグ ネタイトに非磁性相になるMg、更に必要に応じて粒子 50 で550~1500°Cの焼成処理して所望の飽和磁化

ャリアなどに幅広く使用されるものであり、これを多量 に安価かつ任意の飽和磁化を持つものを製造することが 望まれている。

[0003]

【従来の技術】従来、酸化物磁性材料であるマグネタイ ト粉を製造するのに以下の3つの方法が知られている。 【0004】(1) 湿式法(共沈法):Fe²⁺+2F e³⁺の水溶液をアルカリ性にし、マグネタイト粉Fe3 O4を共沈させて製造する。

(2) 乾式法: ヘマタイトαーFe2O3を水素・一酸 10 化炭素あるいは水蒸気中で加熱・還元してマグネタイト 粉Fe3〇4を製造する。

【0005】(3) 粉砕法:天然に産する磁鉄鉱を粉 砕してマグネタイト粉を製造する。

[0006]

20

【発明が解決しようとする課題】上述した従来の製造方 法によって製造したマグネタイト粉は、飽和磁化が一般 的なスピネルフェライトの値と比べて高く、組成による 飽和磁化の調整ができないため、マグネタイト粉の固有 の飽和磁化の値では使用し難い用途には適用できないと いう問題があった。このマグネタイト粉の固有の飽和磁 化の値(例えば~92emu/g)では、従来のフェラ イトなどが用いられていた用途に対して、そのまま置き 換えられなく、置き換えるには使用する回路や装置の変 更が必要となってしまう問題があった。

【0007】また、特公昭62-37783号公報に記 載されているように、下記式で表される組成を持つフェ ライトからなる磁性キャリア粒子がある。

(式1)

結合強度を高めるためにMnを混ぜた混合粉に炭素原子 同士の単結合あるいは二重結合を有する物質を混合し、 焼成してマグネタイトに非磁性相を混在させた酸化物磁 性材料を製造し、所望の飽和磁化を持つ粉末の酸化物磁 性材料を簡易、安価、安全かつ多量に製造することを目 的としている。

[0010]

40

【課題を解決するための手段】図1を参照して課題を解 決するための手段を説明する。図1において、混合工程 2は、ヘマタイト、ヘマタイト+マグネタイトにMgを 0. 20~18. 50wt%に、あるいはマグネタイト にMgを0.20~26.20wt%に、更に必要に応 じてMnを0.20~10.00wt%を混ぜた(両者 を混ぜた場合には合計が18.50wt%以下あるいは 26. 20wt%以下)の混合粉に-C-C-あるいは -C=C-を分子中に有する液体状物質あるいは粉末状 物質を0.1~4.0wt%混合する工程である。

【〇〇11】造粒工程4は、混合粉を球状顆粒にする工 程である。焼成工程5は、混合粉について不活性ガス中

40

を持つマグネタイトと非磁性相が混在した酸化物磁性材 料粉を製造する工程である。

[0012]

【作用】本発明は、図1に示すように、混合工程2でへ マタイト、ヘマタイト+マグネタイトにMgO.20~ 18.50wt%を混ぜ、あるいはマグネタイトにMg O. 20~26. 20wt%を混ぜ、更に必要に応じて Mn O. 20~10.00wt%を混ぜた混合粉(両者 を混ぜた上限は前者18.50wt%以下あるいは後者 26. 20wt%以下) に-C-C-あるいは-C=C 10 を分子中に有する液体状物質あるいは粉末状物質を O. 1~4. Owt%混合し、焼成工程5によって不活 性ガス中で550~1500°Cの焼成を行い、所望の 飽和磁化を持つマグネタイトと非磁性相が混在した粉末 からなる酸化物磁性材料を製造するようにしている。

【〇〇13】この際、焼成工程5の前の造粒工程4によべ って混合粉を球状顆粒とし、粉末の酸化物磁性材料を球 状とするようにしている。従って、ヘマタイト、ヘマタ イト+マグネタイト、あるいはマグネタイトにMgを混 ぜ、更に必要に応じてMnを混ぜた混合粉に炭素原子同 20 士の単結合あるいは二重結合を有する物質を混合し、焼 成してマグネタイトに非磁性相を混在させた酸化物磁性 材料を製造することにより、所望の飽和磁化を持つ粉末 の酸化物磁性材料を簡易、安価、安全かつ多量に製造す ることが可能となる。

[0014]

【実施例】次に、図1から図15を用いて本発明の実施 例の構成および動作を順次詳細に説明する。

【〇〇15】図1は、本発明の1実施例構成図を示す。 図1において、配合工程1は、ヘマタイトあるいはヘマ 30 タイト+マグネタイトにMg、0.20~18.50w t %を配合し、あるいはマグネタイトにMg、0.20 ~26.20wt%を配合し、更に必要に応じてMnを O. 20~10. 00wt%を配合した混合粉(前2者 は合計上限が18 50wt%、後者は合計上限が2 6. 20wt%) を生成する工程である。ここで、Mg は、MgCO3、Mg(OH)2、MgCl2・nH2O、 MgOなどのMgを含む有機、無機の化合物などのうち のMgのみのwt%(重量パーセント)である。同様 に、Mnは、MnO2、Mn3O4、MnOOH、MnC O3、Mn2O3、MnOなどのMnを含む有機、無機の 化合物などのうちのMnのみのwt%である。本明細書 中では説明を簡単にするために単にMg、Mnと記載 し、このMgのO. 20~18. 50あるいはO. 20 ~26.20wt%を配合、更にMnをO.20~1 O. OOwt%を配合し、残部をヘマタイト、ヘマタイ ト+マグネタイト、あるいはマグネタイトとして全体で 100wt%とする(例えばMgOのうちのOの部分の wt%はこの100wt%に含まない)。「ヘマタイト

イトの混合物 (混合粉) として本明細書中で使用する。 また、特に原料のマグネタイトは、

① マグネタイト粉(自社で製造したもの、あるいは他 社から購入したもの)

② 製品中の粒径規格外品(回収品)を粉砕して所定の 粒径にしたマグネタイト粉

のいずれでもよい。尚、後述する製品の顆粒は、例えば 原料粉(1~3 μ m)を10³~10⁷個集めて50~1 O O u mの球状としたものである。従って、一度製造し たマグネタイト粉の製造品(規格外品)を粉砕し、原料 粉を容易に作成できる。

【0016】混合工程2は、混合粉に一〇一〇一あるい は一〇二〇一を分子中に持つ化合物(液状物質あるいは 固体状物質)を0.1~4.0wt%混合する工程であ る。例えば混合粉にポリビニールアルコール2wt%、 分散剤としてポリカルボン酸塩 1 w t %を加え、更に球 状顆粒にする造粒のための水を加える。ここで、水は、 30%~70%の範囲で加える。30%よりも少ない と、混練したときのスラリー粘度が高過ぎて球状化でき なかった。70%よりも多いと、スラリー濃度が薄過ぎ て緻密な球状顆粒が得られなかった。

【0017】粉砕工程3は、混合工程2によって混合し たものを、アトリションミルで湿式粉砕して混合粉の濃 度約50wt%のスラリーを作成する工程である。造粒 工程4は、球状顆粒を生成する工程である。ここでは、 スラリーをアトライターで 1 時間撹拌後、スプレードラ イヤーで熱風乾燥して球状顆粒化する。

【0018】焼成工程5は、造粒工程4で得られた顆粒 を不活性ガス中(例えば窒素ガス中)で550~150 O°Cの範囲の温度で2時間加熱処理し、単相のマグネ タイトと非磁性相が混在した粉末を形成する工程であ る。このときの飽和磁化の値は、Mgの配合率によりコ ントロールできるため、当該Mgの配合率を変えて所望 の飽和磁化を持つ酸化物磁性材料粉の製造が可能となる (図2から図8参照)。尚、ヘマタイトあるいマグネタ イト粉の一部にヘマタイトが存在していた場合、550 ~1500°Cの焼成工程5により、ヘマタイトは不活 性ガス中(弱い還元性雰囲気中)で当該ヘマタイトから マグネタイトへの熱転移に加えて、混合した有機物を不 活性ガス中で加熱して不完全燃焼状態にし、当該有機物 の熱分解時にヘマタイトから酸素を奪って還元してマグ ネタイト化を大幅に促進する。また、Mnを混ぜて粒子 強度を向上させている(図9、図10参照)。

【0019】解砕工程6は、焼成したマグネタイトと非 磁性相(ヘマタイト、ウスタイト、Mg)が混在した粉 体を解砕して製品に仕上げる工程である。以上の工程に 従い、ヘマタイト、ヘマタイト+マグネタイト、あるい はマグネタイトにMgを混ぜ、更に必要に応じて粒子強 度を向上させるためにMnを混ぜた混合粉に一C一C一 +マグネタイト」という記載は、ヘマタイトとマグネタ 50 あるいは-C=C-、および水を混合し良く混練して熱 風乾燥し、球状に造粒した後、不活性ガス中で550~ 1500°Cの範囲で焼成してマグネタイトと非磁性相 が混在した粉体(酸化物磁性粉)を製造することができ る。これにより、所望の飽和磁化を持ち十分な粒子強度 を持つ酸化物磁性粉を安価、多量、かつ安全に製造する ことが可能となった。以下順次説明する。

【〇〇2〇】図2および図3は、本発明の焼成実験結果 例(ヘマタイト+Mg)を示す。これは、ヘマタイト粉 に酸化マグネシウムMgO粉をMg換算で0. 00~4

[0021] O. OOwt%配合し、これに水と混合して粉体濃度5 10

粒子強度=(2.8×(粒子の破壊荷重))/(π×(粒子直径)²)

(1) 加熱処理温度が500°Cの場合には、粒子強 度が<u>10日7</u>Pa以下で小さく、実用に耐えないので、 採用できない。加熱処理温度550°Cの場合には、粒 子強度が<u>10E7</u>Pa以上で実用に耐えるので、適切な 下限の加熱処理温度とした。

【0022】(2) 加熱処理温度1500° Cの場合 には、マグネタイト化不完全でウスタイト(FeO)が 生成し、その結果、試料番号91のように飽和磁化が8 20 6 emu/g以下と小さくなり始め、更に高い温度でも 十分な飽和磁化が得られるが電気炉の実用的な加熱限界 から上限の加熱処理温度とした。

【OO23】(3) 加熱処理温度550~1500° Cの範囲内で、飽和磁化が小さくなり始めるMg配合率 の0. 20wt% (試料番号13、23、33、43、 53、63、73、83、93)の場合、550~11 00°Cのときに飽和磁化40~41emu/gが得ら れ、1200~1500°Cのときに飽和磁化90~8 2 e m u / gが得られたので、この0. 20 w t %をM 30 g配合率の下限とした。一方、飽和磁化が10emu/ g以上となるMg配合率は、550~1500°Cのと きに18.50wt%(試料番号18、28、38、4 8、58、68、78、88、98)が得られたので、 この18.50wt%をMg配合率の上限とした。

【0024】以上の実験結果からヘマタイトにMg、 O. 20~18. 50wt%を混ぜた混合粉を550~ 1500°Cで2時間焼成し、後述する図8の(a)の 斜線部分に示すように、マグネタイトと非磁性相が混在 した任意の飽和磁化を持つ粉末(酸化物磁性材料粉)を 40 生成できることが判明した。

【〇〇25】図4および図5は、本発明の焼成実験結果 例 (ヘマタイト+マグネタイト+Mg) を示す。これ は、ヘマタイトとマグネタイトを1対1で混ぜた粉に酸 化マグネシウムMgO粉のMg換算で0.00~40. OOwt%を配合し、図2および図3と同様な条件で処 理し、測定した実験結果である。

【〇〇26】(1) 加熱処理温度が500° Cの場合 には、粒子強度が<u>10E7</u>Pa以下で小さく、実用に耐 えないので、採用できない。加熱処理温度550°Cの 50 には、マグネタイト化不完全でウスタイト(FeO)が

場合には、粒子強度が<u>10E7</u>Pa以上で実用に耐える ので、適切な下限の加熱処理温度とした。

Owt%のスラリーとし、ポリビニールアルコール 1.

Owt%を添加して、アトライタで1時間撹拌した後、

スプレードライヤーで噴霧乾燥して顆粒化した。得られ

た顆粒を、窒素ガス中で500~1500°Cで2時間

加熱処理した。加熱処理後の各試料の飽和磁化は、振動

型磁力計によって測定した。また、試料の粒子強度は、

微小圧縮試験機(島津製作所製MCTM-500)を用 いて測定し、以下に示す平松の式を用いて計算して求め

【OO27】(2) 加熱処理温度1500°Cの場合 には、マグネタイト化不完全でウスタイト(FeO)が 生成し、その結果、試料番号91のように飽和磁化が8 6 e m u / g以下と小さくなり始め、更に高い温度でも 十分な飽和磁化が得られるが電気炉の実用的な加熱限界 から上限の加熱処理温度とした。

【0028】(3) 加熱処理温度550~1500° Cの範囲内で、飽和磁化が小さくなり始めるMg配合率 のO. 20wt%(試料番号13、23、33、43、 53、63、73、83、93)の場合、550~11 OO°Cのときに飽和磁化61emu/gが得られ、1 200~1500°Cのときに飽和磁化90~82em u/gが得られたので、このO.20wt%をMg配合 率の下限とした。一方、飽和磁化が10emu/g以上 となるMg配合率は、550~1500°Cのときに1 8.50wt%(試料番号18、28、38、48、5 8、68、78、88、98)が得られたので、この1 8. 50wt%をMg配合率の上限とした。

【0029】以上の実験結果からヘマタイト+マグネタ イトにMg、0.20~18.50wt%を混ぜた混合 粉を550~1100° Cで2時間焼成し、後述する図 8の (b) の斜線部分に示すように、マグネタイトと非 磁性相が混在した任意の飽和磁化を持つ粉末(酸化物磁 性材料粉)を生成できることが判明した。

【〇〇3〇】図6および図7は、本発明の焼成実験結果 例(マグネタイト+Mg)を示す。これは、マグネタイ トに酸化マグネシウムMgO粉のMg換算で0.00~ 40.00wt%を配合し、図2および図3と同様な条 件で処理し、測定した実験結果である。

【〇〇31】(1) 加熱処理温度が500° Cの場合 には、粒子強度が<u>10E7</u>Pa以下で小さく、実用に耐 えないので、採用できない。加熱処理温度550°Cの 場合には、粒子強度が<u>10E7</u>Pa以上で実用に耐える ので、適切な下限の加熱処理温度とした。

【OO32】(2) 加熱処理温度1500°Cの場合

(式1)

生成し、その結果、試料番号91のように飽和磁化が86emu/g以下と小さくなり始め、更に高い温度でも十分な飽和磁化が得られるが電気炉の実用的な加熱限界から上限の加熱処理温度とした。

【0033】(3) 加熱処理温度550~1500° Cの範囲内で、飽和磁化が小さくなり始めるMg配合率の0.20wt%(試料番号13、23、33、43、53、63、73、83、93)の場合、550~1500° Cのときに飽和磁化91~82emu/gが得られたので、この0.20wt%をMg配合率の下限とした。一方、飽和磁化が10emu/g付近あるいは以上となるMg配合率は、550~1100° Cのときに26.20wt%(試料番号19、29、39、49)が得られ、1200~1500° Cのときに18.50wt%(試料番号58、68、78、88、98)が得られたが、両者を通して26.20wt%をMg配合率の上限とした。

【0034】以上の実験結果からマグネタイトにMg、 0 20~26 20wt%を混ぜた混合粉を550~ 1100°Cで2時間焼成し、後述する図8の(c)の 20 斜線部分に示すように、マグネタイトと非磁性相が混在 した任意の飽和磁化を持つ粉末(酸化物磁性材料粉)を 生成できることが判明した。

【0035】図8は、本発明の飽和磁化制御範囲の説明図を示す。これは、既述した図2から図7の実験結果を判りやすくまとめたものである。横軸は加熱処理温度。 Cであり、縦軸は飽和磁化emu/gであり、斜線部分は飽和磁化制御範囲である。

【0036】図8の(a)は、図2および図3のヘマタ イト+Mgの場合の飽和磁化制御範囲を示す。

(1) $550\sim1100^\circ$ Cの加熱処理温度の範囲では、図2および図3で既述したようにMg配合率0.20~18.50wt%の範囲で変えることにより、図中の斜線部分に示すように、飽和磁化40~10emu/gの範囲の任意の飽和磁化を得ることができる。

【0037】 (2) 1200~1500° Cの加熱処理温度の範囲では、図2および図3で既述したようにMg配合率0.20~18.50wt%の範囲で変えることにより、図中の斜線部分に示すように、飽和磁化90~10emu/gの範囲の任意の飽和磁化を得ることが 40できる。

【0038】図8の(b)は、図4および図5のヘマタイト+マグネタイト+Mgの場合の飽和磁化制御範囲を示す。

【0039】(2) 1200~1500°Cの加熱処 50

理温度の範囲では、図4および図5で既述したようにMg配合率0.20~18.50wt%の範囲で変えることにより、図中の斜線部分に示すように、飽和磁化90~10emu/gの範囲の任意の飽和磁化を得ることができる。

【0040】図8の、(c)は、図6および図7のマグネタイト+Mgの場合の飽和磁化制御範囲を示す。

(1) 550~1500° Cの加熱処理温度の範囲では、図6および図7で既述したようにMg配合率0.20~26.20wt%の範囲で変えることにより、図中の斜線部分に示すように、飽和磁化90~10emu/gの範囲の任意の飽和磁化を得ることができる。

【0041】図9は、本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg+Mn)を示す。これは、ヘマタイト粉に酸化マグネシウムMgO粉のMg換算で3.60wt%配合したものに、酸化マンガンMn3O4のMn換算で0.0~10.00wt%配合し、図2および図3と同様な条件で処理し、測定した実験結果である。

【0042】(1) 加熱処理温度が550° Cの場合、Mnを配合しない図2の試料番号16の粒子強度13E7 Paに比し、Mn配合率を多くするに従い、図示のように徐々に粒子強度17E7 Paへと大きくなり、Mnを配合して粒子強度を大きくできることが判明した。この際、Mn配合率を大きくするに従い、飽和磁化が27emu/gから39emu/gへと大きくなるが、これはMn自身が磁化を持ちこのMnを配合したことにより飽和磁化が大きくなったものである。

【0043】(2) 加熱処理温度が1300° Cの場合、Mn を配合しない図3の試料番号66 の粒子強度36 E9 Paに比し、Mn 配合率を多くするに従い、図示のように徐々に粒子強度52 E9 Paへと大きくなり、Mn を配合して粒子強度を大きくできることが判明した。この際、同様にMn 配合率を大きくするに従い、飽和磁化が67 e mu / g から80 e mu / g へと大きくなるが、これはMn 自身が磁化を持ちこのMn を配合したことにより飽和磁化が大きくなったものである。

【0044】図10は、本発明のMg配合時のMn添加による粒子強度説明図を示す。これは、図9の焼成実験結果例をグラフ化して判り易くしたものである。横軸はMn配合率wt%であり、縦軸は粒子強度Paである。【0045】図10の(a)は、図9の550°C、2Hr、N2中で、ヘマタイト+Mg3 60wt%混合し、更にMnを配合して焼成したときの、Mn配合量と粒子強度の関係を示す。このグラフから、Mnを配合することにより、焼成したときの粒子強度を高めることができると判明する。

【0046】図10の(b)は、図9の1300°C、 2Hr、N2中で、ヘマタイト+Mg3.60wt%混合し、更にMnを配合して焼成したときの、Mn配合量と粒子強度の関係を示す。このグラフから、Mnを配合 することにより、焼成したときの粒子強度を高めること ができると判明する。

【0047】図11は、本発明の加熱処理温度曲線例を示す。これは、既述した図2から図10のときに使用する加熱処理温度曲線例である。焼成の場合、N2雰囲気中で加熱し、200°C/Hrの割合で加熱し、所定の加熱処理温度となったときに2Hr(2時間)保持する。そして、200°C/Hrの割合で冷却する。

【0048】次に、図12から図14を用い、焼成したマグネタイトと非磁性相からなる本発明と、比較例との10組成分布状態の違いについて説明する。ここで、ヘマタイトにMg3.60wt%配合した試料を前述の図2および図3の場合と同様に、スプレードライヤーを用いて顆粒化し、φ12.5mmの金型に1g盛り込んで3t/cm²で成形し、以下の条件で焼成した後、表面を平面研磨し、FeとMgの分布状態をEPMA(X線マイクロアナライザ)により分析した。

【0049】・本発明の材料は、1300°C、2時間、N2中で焼成した(図11参照)。

・比較例の材料は、1300°C、2時間、空気中で焼 20成した(図11のN2雰囲気中の代わりに空気雰囲気中で焼成)。

【〇〇5〇】図12は、本発明の材料におけるFeの分布例を示す。ここで、白い粒子状の部分がFeのある部分である。図13は、本発明の材料におけるMgの分布例を示す。ここで、白い粒子状の部分がMgのある部分である。

【0051】従って、図12および図13から本発明の材料は、Feのある領域とMgのある領域とがはっきりと分かれていることから、Fe化合物(マグネタイトな 30ど)と、Mg化合物との混在物であることが判明した。 【0052】図14は、比較例の材料におけるFeの分

「OO52」図14は、丘牧例の材料におけるFeの方 布例を示す。ここで、白い部分がFeであって、全面に 分布している。図15は、比較例の材料におけるMgの 分布例を示す。ここで、白い部分がMgであって、全面 に分布している。

【0053】従って、図14および図15から比較例の 材料は、Feのある領域とMgのある領域とがほぼ完全 に重なっており、FeとMgの化合物であることが判明 した。

【〇〇54】以上のことから、本発明の材料(図12および図13)は、単一相ではなく、Fe化合物(マグネタイトなど)と、Mg化合物とが混在して存在、即ちFe化合物であるマグネタイトと、Mg化合物である非磁性相とが混在して存在し、マグネタイトによる飽和磁化(90emu/g)を非磁性相であるMg化合物が希釈して飽和磁化を小さくし、任意の飽和磁化が得られたことが判明した。

【0055】一方、焼成を空気中で行うこと以外は全く 同じ条件で作成した図14および図15の比較例の材料 50

の場合には、FeとMgの単一相の化合物と判明し、本願発明のようにマグネタイトと、非磁性相との混合により任意の飽和磁化を持つ材料を作成することができない。尚、図2ないし図7、および図9において、「粒子強度(Pa)」の欄に記載されている数字、例えば「12 E 6」は、「12 × 10 6」を表す、技術計算用の周知の略号である。また、単位に使用されている「Pa」は、もともと圧力の単位(「パスカル」と呼び、カノ面積(正確にはニュートン/平方メートル)の単位)であるが、粒子強度の測定結果が粒子破壊に必要な粒子断面積当たりの力として表現されるため、粒子強度の次元が「カノ面積」となり、圧力の単位の次元と同じとなっている。

[0056]

【発明の効果】以上説明したように、本発明によれば、ヘマタイト、ヘマタイト+マグネタイト、あるいはマグネタイトにMgを混ぜ、更に必要に応じてMnを混ぜた混合粉に炭素原子同士の単結合あるいは二重結合を存する物質を混合し、焼成して任意の飽和磁化を持つる構成を収益する構成を担けれるため、所望の飽和磁化を持つ酸化物磁性材料を簡易、安価、安定、かつ多量に製造することができる。特に、多量のヘマタイト、ヘマタイト+マグネタイトにMg(Mg化合物)および必ずなイトにMg(Mg化合物)を混ぜた混合粉を一度に焼成工程5によってマグネタイトと非磁性相が混在した所望の飽和磁化を持つ粉体(酸化物磁性材料)に、簡単な工程、容易、安定、かつ安価に製造できた。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の1実施例構成図である。

【図2】本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg、 続く)である。

【図3】本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg、 続き)である。

【図4】本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+マグネタイト+Mg、続く)である。

【図 5 】本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+マグネタイト+Mg、続き)である。

[図6]本発明の焼成実験結果例(マグネタイト+M 40 g、続く)である。

【図7】本発明の焼成実験結果例(マグネタイト+Mg、続き)である。

【図8】本発明の飽和磁化制御範囲の説明図である。

【図9】本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg+Mn)である。

【図10】本発明のMg配合時のMn添加による粒子強度説明図である。

【図11】本発明の加熱処理温度曲線例である。

【図12】本発明の材料におけるFeの分布例である。

【図13】本発明の材料におけるMgの分布例である。

【図14】比較例の材料におけるFeの分布例である。

【図15】比較例の材料におけるMgの分布例である。

【符号の説明】

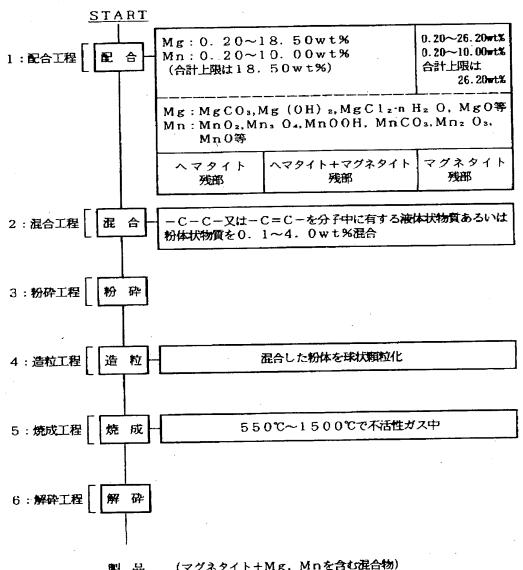
1:配合工程 2:混合工程 3:粉砕工程

4:造粒工程 5: 焼成工程

6:解砕工程

【図1】

木発明の1実施例構成図



(マグネタイト+Mg、Mnを含む混合物) 製品

【図2】

太浄明の虔成実験結果例(ヘマタイト+Mg,続く)

本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg,続く)					
試料	Mg配合率	加熱処理温度	雰囲気	飽和碳化	粒子強度
番号	(wt%)	(℃)		(emu/g)	(Pa) 12E6
1 2	0.00 0.10	500 同上	N. 同上	4 0 4 1	15E6]
1 3 1	0.20	同上	配上	41 35	14E6
4 5	0.80 1.60	同上 同上	同上 同上	29	13E6 13E6
5 6	3.60	同上	同上	27	12E6 14E6
7 8	13.20 18.50	同上 同上	同上 同上	16 10	14E6
9	26.20	同上	同上	5	12E6 11E6
10	40.00	同上	同上 N ₂	40	12E7
1 1 1 2	0.00 0.10	550 同上	同上	41	13E7 12E7 13E7
13	0.20	同上	同上 同上	41 35	12E7
14	0.80 1.60	同上 同上	同上	29	14E7 13E7
16	3.60	同上	同上	27 16	13E7
17	13.20 18.50	同上	同上	10	15E7 14E7
19	26.20	同上	同上	5 1	15E7 13E7
20	0.00	600	N ₂	40	15E8
122	0.10	同上	同上	41	15E8
23	0. 20 0. 80	同上	同上 同上	41 35	16E8 15E8
125	1.60	同上	同上	2 8 2 7	14E8
2 6 2 7	3.60 13.20	同上 同上	同上	16	16E8 15E8
28	18.50	同上	同上	11	16E8 15E8
2 9 3 0	26. 20 40. 00	同上 同上	同上	5	17E8
3 1	0.00	800	N.	40	25E8 26E8
32	0.10 0.20	同上 同上	同上同上	41	26E8
34	0.80	同上	同上	35	26E8 25E8
35	1.60 3.60	同上	同上	2 9 2 6	28E8
37	13.20	同上	同上	16	26E8 25E8
38	18.50 26.20	同上	同上 同上	4	27E8
40	40.00	同上	同上	1	23E8
41	0.00 0.10	1100 同上	N ₂ 同上	40	16E9 15E9
4243	0.20	同上	同上	40	16E9
44	0.80	同上	同上	3 5 2 9	16E9 17E9
45	3.60	同上	同上	24	17E9
47	13.20	同上	同上	16	17E9 16E9
48	18.50	同上	同上	5	17E9
50	40.00		同上	1	17E9

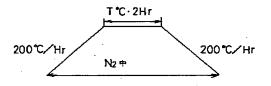
[図3]

本発明の焼成実験結果例(ヘマタイト+Mg, 続き)

試料	Mg配合率	加州处理温度	雰囲気	的和語化	粒子強度
書号	(wt%)	(℃)		(emu/g)	(Pa)
5123455678 555555555	0. 0.0 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50	1200 同上 同上 同上 同上 同上	2. 日上上上上上上	92 92 90 87 81 67 32 21	23E9 24E9 25E9 26E9 25E9 26E9 26E9 23E9
5 9 6 0	26. 20 40. 00 0. 00	同上 同上 1300	同上 同上 N:	92	25E9 27E9 30E9
623 634 656 667 689 70	0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	月 月 月 月 日 月 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	月 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	92 90 87 81 67 32 21 61	34E9 34E9 35E9 35E9 36E9 36E9 365E9
71 72 73 74 75 76 77 78 79 80	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	1400 局上 同上 同上 同上 同上 同上 同上 同上 日上 日上 日上 日上 日上 日上 日 日 日 日	N. 一年 日间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间	92 92 90 87 82 67 31 20 6	99999999999 34455567665 333333333333
81 82 83 84 85 86 87 88 99	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	1450日上上上上上上上上上上上上上上	N. 是上上上上上上上上上上上上	92 92 90 87 81 66 32 20 6	36E9 37E9 37EE9 37EE99 376EE99 376 377 37
91 92 93 94 95 96 97 98 99	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	15000000000000000000000000000000000000	2. 上上上上上上上上上上	86 85 82 77 70 65 25 16 3	40E9 42E9 40E9 41E9 42E9 43E9 43E9 41E9 40E9

【図11】

本発明の加熱処理固度曲線例



[図9]

本発明の焼成実験結果例 (ヘタマイト+Mg+Mn)

Mg = 3.60wt%

試料	Mn配合率 (wt%)	加熱処理温度 (℃)	展題家	飽和職化 (emu/g)	粒子強度 (Pa)
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11	0. 00 0. 10 0. 20 0. 50 1. 00 2. 00 3. 00 4. 00 6. 00 8. 00	0 544444444444 5屆同旬同同同同同同同同同同同	2. 电负电阻电阻电阻电阻	77789123579 22223333333	14E7 14E7 14E7 16E7 17E7 17E7 17E7 17E7 17E7
1 2 1 3 1 4 1 5 1 6 1 7 1 8 1 9 2 0 2 1 2 2	0. 00 0. 10 0. 20 0. 50 1. 00 2. 00 3. 00 4. 00 6. 00 8. 00 10. 00	1300周上 同日上 同日上 同日上 同日上 同日上 同日上 同日上 同日上 日日上 日日	7. 上上上上上上上上上上 2. 同国同国同同同同国同国	67 67 67 68 69 71 72 75 75 70	36E99 36E99 405E9 405E9 512E99 522E9

【図4】

本発明の焼成実験結果例 (ヘマタイト+マグネタイト+Mg, 続く)

本発明の競戏民豪結果例(ハマクイ			- Hr		M 8 , W(\)
試料	Mg配合率	加熱処理温度	雰囲気	飽和磁化	粒子強度
番号	(wt%)	(5)		(e=u/g)	(Pa) 11E6
1 1	0.00	500	N ₂	60	12E6
2 3	0.10	同上	配上	61	
3	_0. 20	同上	配上	61	15E6 12E6
4	0.80	同上	同上	55	
5	1.60	同 上	回上	49 37	11E6 11E6
5 6 7	3.60	同上	同上	26	15E6
7	13.20	同上	同上	20	1 2 E 6
8	18.50 26.20	同上	同上 同上	7	14E6
9	26. 20 40. 00	同上 同上	同上	3	14E6
10		, ,			
1 1	0.00	<u>5</u> 50	N₂	62	15E7
12	0.10	同上	具上	62	15E7 14E7 15E7
13	0.20	同上	具上	61	145
14	0.80	同上	配上	5 2 4 5	17E7
15	1.60	同上	配	45	17E7
16	3. 60	同上		40 31	16E7
17	13.20	同上 同上	同上 同上	18	1357
18	18.50 26.20	同上 同上	同上	7	13E7 16E7
19	40.00	同上	同主	3	17E7
<u> </u>	<u> </u>		<u> </u>	<u> </u>	
21	0.00	600	N₂ ⇔ L	62 62	17E8 15E8
22	0.10	同上		61	16E8
23	0.20	同上 同上	同上 同上	52	14E8
24	0.80	四上 同上	同上	44	15E8
25 26	1.60 3.60	同上	一直上	40	17E8
27.	13.20	一门	一直	31	17E8 15E8
28	18.50	富主	同上	20	15E8
29	26. 20	同主	同正	6	14E8
30	40.00	同正	同上	3	15E8
31	0.00	800	N ₂	62	30E8
32	0.10	同上	同上	62	36E8
33	0. 20	同上	証	61	35E8
131	0. 80		証	53	36E8
35	1.60	同主	同上	44	34E8
35 36 37 38	3.60	同正	同上	40	38E8
37	13.20	同正	同上	32	35E8
38	13. 20 18. 50	同上	同上	20	36E8
39	26.20	同上	同上	7	37E8
40	40.00	同上	同上	3	33E8
41	0.00	1100	N ₂	6 2 6 2	17E9
42	0. 10	同上	同上	62	15E9
43	0.20	同上	同上	l 61	16E9
44	0.80	同上	同上	55	16E9
45	1.60	同上	同上	44	17E9
46	3.60	同上	同上	41	17E9
47	13.20	同上	同上	3 2 2 1	17E9
48	18.50	同上	同上	21	16E9
49	26.20	同上		7	17E9
50	40.00	同上		2	17E9

【図5】

本発明の焼成実験結果例 (ヘマタイト+マグネタイト+Mg、続き)

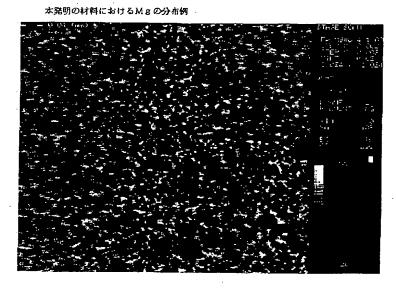
談科	Mg配合率	加熱処理温度	雰囲気	的和此化	粒子強度
番号 51	(wt%) 0.00	(°C) 1200	N ₂	(= 1/ g) 92	(Pa) 22E9
52 53 54 55	0. 10 0. 20 0. 80 1. 60	日上 同上 同上	同上同上	92 90 87 81	24E9 25E9 25E9 25E9
56 57 58 59 60	3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	同上 同上 同上		67 32 21 6	26E9 24E9 25E9 25E9 28E9
61 62 63 64 65 66 67 68 70	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	1300日上上上上上上上上上上上上上上上	2. 四面间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间	92 990 87 867 32 26	31E9 33E9 34E9 35E9 34E9 35E9 36E9 36E9 35E9
71 72 73 74 75 76 77 78 79	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	1400		92 990 87 867 30 61	33E9 34E9 34E9 35E9 36E9 36E9 36E9 36E9 35E9
81 82 83 84 85 86 87 88 90	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	14同同同同同同同同同同同	2. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.	9997162061 88632	38E9 36E9 36E9 37E9 36E9 37E9 36E9 36E9
91 92 93 94 95 96 97 98 99	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	1500 同上上上上上上上上上	Nz 同上 同上 同上 同上 同上 同上	86527 7055631 1	41E9 40E9 41E9 41E9 41E9 41E9 41E9 41E9

BEST AVAILABLE COPY

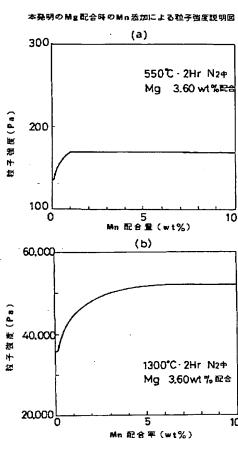
【図12】

本発明の材料におけるFeの分布例

【図13】



[図10]



【図6】

本発明の焼成実験結果例(マグネタイト+Mg, 続く)

訊料	Mg配合率	加熱処理温度	雰囲気	E AUGHL	粒子強度
番号	(wt%)	· (°C)		(emu/g)	(Pa)
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	00144444444444444444444444444444444444	2. 4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4	65448044506 5444506	11E6 12E6 11E6 11E6 13E6 11E6 14E6 15E6 11E6
11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	0 5年上上上上上上上上上上上	2. 上上上上上上上上上上	9999887321 6	15E7 15E7 16E7 15E7 18E7 17E7 16E7 17E7
21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	600 同日上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上	N. 上上上上上上上上上上上上上上上	92 91 98 98 72 34 25 10 6	14E8 15E8 15E8 14E8 16E8 15E8 15E8 16E8
31 32 33 34 35 36 37 38 39	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	800 同上 同日上 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日日 日	N.同同同同同同同同同同同同	92 91 88 82 72 33 25 11	22E8 26E8 25E8 26E8 26E8 25E8 25E8 27E8 23E8
41 42 43 44 45 46 47 48 49 50	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	1100 同上	N. 上上上上上上上上上上上上上	92 92 91 88 83 72 33 25 11	17E9 15E9 16E9 16E9 17E9 17E9 17E9 17E9

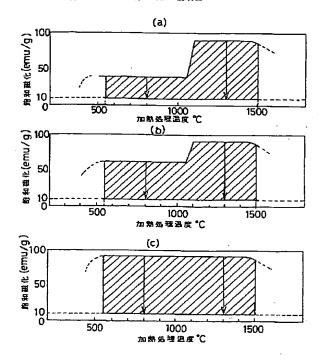
【図7】

本発明の焼成実験結果例(マグネタイト+Mg、続き)

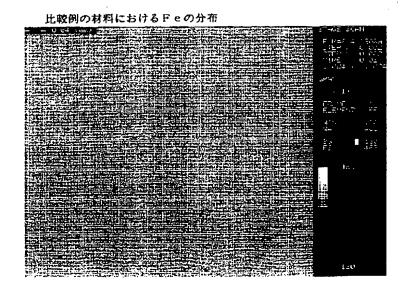
433.7	本光明の施門		マケスフィ	L TIME &	Mai
試料	Mg配合率 (wt%)	加熱処理温度 (℃)	雰囲気	飽和磁化 (emu/g)	粒子強度 (Pa)
51 52 53 54	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80	1200 同上 同上	N ₂ 同上 同上 同上	92 92 90 87	(Pa) 23E9 24E9 26E9 25E9
5567890 5560	1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00		间上 同上 同上 同上	81 67 33 21 7	26E9 26E9 24E9 25E9 25E9 28E9
61 62 63 64 65 667 689 70	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	13001111111111111111111111111111111111	2 年 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	92 990 897 863 216 1	35E9 33E9 34E9 35E9 35E9 37E9 36E9 35E9
71 72 73 74 75 76 77 78 79 80	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	14周周周周周周周周	2. 用用间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间间	999988551 99988651	33E9 34E9 34E9 35E9 36E9 37E9 36E9 36E9 35E9
81 82 83 84 85 86 87 88 89	0.00 0.10 0.20 0.80 1.60 3.60 13.20 18.50 26.20 40.00	04月月十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	2. 电电阻电阻电阻电阻	9998863161	38E9 36E9 36E9 36E9 36E9 36E9 37E9 38E9 37E9
91 92 93 94 95 96 97 98 99	0. 00 0. 10 0. 20 0. 80 1. 60 3. 60 13. 20 18. 50 26. 20 40. 00	0 年上上上上上上上上	2. 四年一年十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	86 882 70 53 12 1	40E9 40E9 40E9 41E9 42E9 41E9 43E9 40E9 41E9

BEST AVAILABLE COPY

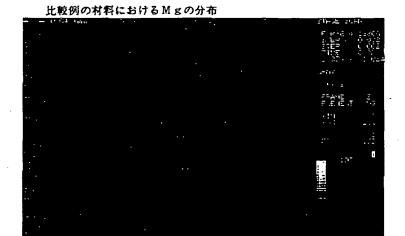
【図8】
本発明の飽和磁化制御範囲の説明路



【図14】



【図15】



フロントページの続き

下川 明 (72) 発明者

東京都港区新橋5丁目36番11号 富士電

気化学株式会社内

(58)調査した分野(Int.Cl.6, DB名)

CO1G 49/00 - 49/08